

村の鎮守から都会の鎮守へ

小汐井神社 宮司 宇野日出生

草津市大路おおじに小汐井神社おしおいが鎮座します。

JR草津駅から徒歩五分の距離にあり、林立するタワーマンションや軒を連ねる商業施設に接し、境内には神社直営の立体駐車場やマンションなどが広い面積を占め、さながら「都会の神社」としてのオーラが見て取れます【写真1】。小汐井神社の御祭神は、天照大神の三女神の一柱である「田心姫命たごりひめのみこと」です。女神様をお祀りしていますので、古来の社名は「女體大権現」「女體大明神」と称していました。享保十一年（一七二六）銘の手水鉢には女體大権現と記されています【写真2】。明治十一年（一八七八）には、社名を「小汐井神社」と改めます。命名は昔から本殿の後方にあった「小汐井」と称する古池にちなみます【写真3】、右上部に「小汐井ノ池」。今はその池の中央に水天宮が鎮座していますが、往事のよすがを唯一現在に伝えています。そもそも境内や周辺一帯は、昔から地下水の



写真1 小汐井神社拝殿・本殿の後方にそびえるマンション群

豊富な地域として知られており、したがって今も草津では造り酒屋が、この名水を使って地酒を生産しています。水天宮の池水も地下水で、手水鉢の水も地下水を四六時中汲み上げたものです。手水鉢の横には蛇口を二カ所設けており、お参りの方々は



写真2 流れを絶やさぬ手水鉢の地下水

ペットボトルなどに給水して、お茶やコーヒーなどの飲用に使われています。草津駅周辺は一気に都会化したため、今や名水を一般の方が自由に取得できるのは、当社の地下水（御神水）のみとなっています。なお小汐井神社の「水みくじ」は、この御神水を使用しています。

このような都会の神社ではありませんが、



写真3 小汐井神社境内図(明治時代初期)

昔はどうだったのでしょうか。神社には永享十二年(一四四〇)の造立棟札が残されていて、はるか室町時代には崇敬されていたことが確認できます。江戸時代になりますと、草津は東海道と中山道の分岐点として注目されるようになりました。その時、小汐井神社は中山道最初の神社として賑わいました。ところが鎮座する大路井村おちのいの集落規模は小さなもので、幕末の嘉永元年(一八四八)で四十六戸、明治十一年(一八七八)でも七十六戸でした。現在は約四千六百戸ですから、隔世の感があります。さら

に境内にも大きな変化がありました。明治十九年(一八八六)には境内鳥居前の道路拡幅事業が行われたことよって、本殿以下の移動・改築がなされました。この時「小汐井池」を埋めることは崇敬上忍びないと理由から、本殿を池より更に後面まで退歩させたのでした。また本殿もかなり傷んでいたので再建しました。それが現在の本殿です【写真4】。

さらに大きな変化がありました。明治二十二年(一八八九)に鉄道が敷設されたことです。湖東鉄道

(JR琵琶湖線)

と関西鉄道(JR草津線)の分岐点として草津駅が設けられ、駅一帯は一躍脚光を浴びることになりました。広い敷地に駅舎が建設されると、多くの人びとの利用が始まりました。神宮参詣の主要路線ともなり、乗り継ぎ待ちの人のために駅周辺には飲食店や旅館ができ



写真4 小汐井神社本殿

ました。明治二十六年(一八九三)の草津駅利用人員は、年間約二十万人。ちなみに現在は九百万人で、県下一です。草津駅界隈の急速な発展が起り、これが今に見る景観へとつながっているのです。

小汐井神社は県都の玄関口ともいわれるJR草津駅にほど近く、都心の神社として多くの参拝者が訪れます。ビル群に囲まれています。都会のオアシスとしても重要な役割を担っているのです。